

ヒグマと共存するために



ヒグマは、国内では北海道のみに生息する日本最大の陸生哺乳類で、北海道の豊かな自然を代表する野生生物であると同時に、人や家畜、農作物に被害を与える存在にもなっています。

北海道の野山はヒグマの生息域となっており、中頓別町でもヒグマの目撃情報が毎年多数寄せられています。

人身被害に遭わないためには、ヒグマについての正しい知識を持つことが必要となります。

ヒグマとは

ヒグマは、世界では北半球に広く分布しており、さまざまな自然環境で生息しています。日本では北海道にのみ生息しており、国内では最も大きな陸上哺乳類です。

雑食性で、フキや木の実などの植物、蟻などの虫、サケやマスなど魚類、シカなど哺乳類を春から秋にかけてその時に最も手に入りやすい食べ物を大量に食べます。

ヒグマの体長はオスで2m、

メスで1・5mほどで聴力に優れ、昼夜問わず行動できる視力をもっています。群れを作らず単独もしくは母子で行動し、大半のヒグマは警戒心が強く、人を避けて生活しています。

ヒグマは冬眠中に1〜3頭の子どもを産みます。温かくなり冬眠が終わると冬眠穴の外に出て母子で生活します。育児中の母グマは子どもを守るために攻撃的になっています。この時期は山菜採りのシーズンと重なるため目撃情報や事故が多くなります。

5月から7月頃は繁殖期となっており、メスを探すためにオスの行動範囲が広がります。この時期は、独り立ちしたばかりの若いオスのヒグマやオスを避けた母子のヒグマが市街地に出没することがあります。

秋になると冬眠に向けて食いだめを行い、体重を30〜40%ほど増やします。どんぐりなどを食べるほか、サケやマスなどの魚を求めて河口付近に姿を現します。

ヒグマは食べ物への執着が強く、一度人間の食べ物の味を覚えてしまうとそれを目当てに民家のそばに出没し、人間を恐れずに行動するようになります。

北海道とヒグマ

蝦夷から北海道と命名された約150年前には、ヒグマは平野部を含む北海道のどこにでもいました。その後1970年代から1980年代にかけて開拓により農村が豊かになったりヒグマの数を減らすための「春グマ駆除」が行われたりした結果、ヒグマの生息地はかなり狭くなりました。その後1990年代からヒグマの数は回復し、現在では分布も1970年代とほぼ同じくらいに戻っています。

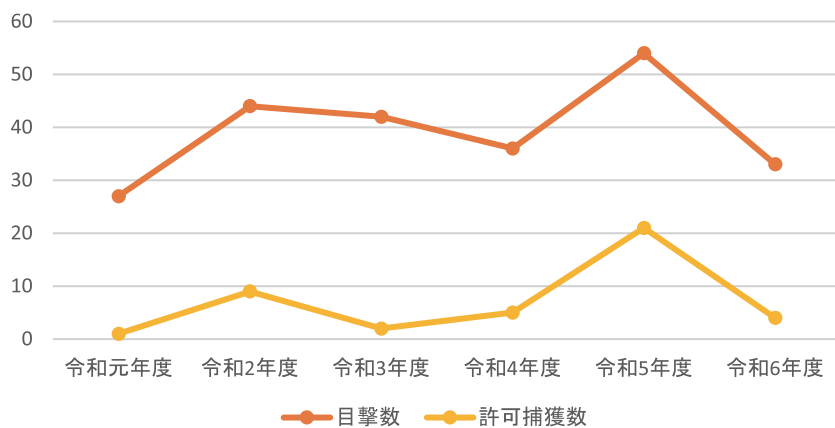
中頓別町とヒグマ

令和6年度の中頓別町でのヒグマの目撃情報は33件、許可捕獲数は4件となっています。目撃場所は大頓別地区や敏音知地区などが多いですが、中頓別地区

区の頓別川堤防でも糞が確認されています。

令和6年度は令和4年度以前とほぼ同程度の目撃数と捕獲数になっています。近年一番目撃数と捕獲数が多かったのは令和5年度で、目撃数が54件、捕獲数は21件となっています。

ヒグマの目撃数と許可捕獲数



ヒグマと共生するために

野山であればどこでもヒグマに出会う可能性があり、実際にヒグマによる人身被害の多くは野山で発生しています。

山菜採りやキノコ狩り、登山などで野山に入るときは音を出しヒグマに人間の存在を知らせること、単独行動をせず複数人で行動すること、周囲の音や匂いに気を配ることの3点を意識しましょう。人間と食べ物を結びつけていない限りは、人間の話し声や鈴の音が聞こえるとヒグマのほうから避ける行動をします。ポイ捨てなどをせず人間の食べ物の味を教えないことも大切となります。

また、過去にヒグマがいないとされていた場所であっても、現在はヒグマが生息している可能性があります。たとえ長年通っている場所でも、事前にヒグマの生息・出没状況の情報収集を行い、短時間の活動でもクマスプレーなどの対策グッズを用意しヒグマとの遭遇に備えましょう。

市街地にヒグマを近寄らせない

ためには、ゴミ出しのルールを守る、匂いのある干物や保存食を屋外に放置しない、お墓のお供え物を放置しない、家庭菜園の作物を放置せず収穫することの4点が大切となります。ヒグマが出没しにくい環境をつくるために道路の周辺や家、農地などの周囲で刈り払いや草刈りを行い、ヒグマが身を隠す場所を取り除くことも重要となります。

万が一、ヒグマと出会ったときはヒグマを興奮させないために、動きを止めて様子を伺い、ヒグマを見ながらゆっくり後ずさりし離れましょう。クマスプレーはヒグマが近距離に近づいたときに役立ちます。かばんの中にしまわずすぐ取り出せるように準備しておきましょう。

